

絶滅固有種オガサワラカラスバトは オガサワラビロウの実を食べていた?

鈴木 惟 司 (首都大学東京理工学研究科)

要 約

オガサワラカラスバトは小笠原諸島産絶滅固有種である。本種は明治時代に至るまで生存していたが、他の絶滅固有鳥類と同様、生態に関する情報はほとんど残されていない。最近行なわれた古文献再調査の結果、本種は小笠原の林に多いオガサワラビロウの実を食していたことが示された。

I. はじめに

小笠原には固有のハトが2種生息していた。ひとつは絶滅固有種オガサワラカラスバト *Columba versicolor* であり、もう1種は現在も小笠原に生息するアカガシラカラスバト *C. janthina nitens* (カラスバト *C. janthina* の小笠原産固有亜種) である (日本鳥学会、2000)。同属に分類されることから判るように、両種は体色も形態も似通っている。またこの仲間は一般に植物食性として知られており、両種も同所的に植物の種子や果実という共通資源を利用していたものと考えられる。ただ両種は体サイズが異なり、オガサワラカラスバトはアカガシラカラスバトに比べてひとまわり大きいことが知られる (翼長: オガサワラカラスバト 254-261mm vs. アカガシラカラスバト 219-241mm、尾長: 180-186 vs. 140-168mm; 清棲、1978、による)。

面積的にさほど広くもない小笠原諸島に、オガサワラカラスバトとアカガシラカラスバトという近縁2種のハトが近年まで共存していたことは生態学的にも興味深い。彼らの共存が可能であったのは、生息場所か食性あるいはその両者が異なっていたからだと思われる。特に、両種の体サイズの違いは利用する食物の違いを連想させ、両種は利用する食物を違えることによって小笠原での共存を可能にしたのではないかと考えられる。

永らく不明な部分が多かったアカガシラカラスバトの生態的知見も、この十数年の間に格段の進展があり (たとえば東京営林局、2006)、彼らの食性についても情報が蓄積されてきている。それに対し、オガサワラカラスバトは1889年以降生存個体が確認されていないこともあって、従来知られている本種の生態についての記述は、1889年9月に P. A.

Holstの採集したオス個体が換羽中であった (Seeböhm, 1890) というくらいである。したがってオガサワラカラスバトの食性に関する調査なども現在まで何も知られておらず、彼らが何を食べていたのか、それがアカガシラカラスバトの食物とどう違っていただのかなどについては不明の状態にある。

筆者は、オガサワラカラスバトの絶滅以前に小笠原に上陸した人の観察記録を探索することにより本種の食物について何らかの情報を得られるのではないかと考え、調査を進めた。本稿でその調査結果について紹介したい。

Ⅱ. オガサワラカラスバトはオガサワラビロウの実を食べていた

前述のように、オガサワラカラスバトの生存が最後に確認されたのは1889年である。すなわちこの年にHolstによって媒島で1個体が採集されている (Seeböhm, 1890)。Holstは採集時の観察記録を残したり標本にした採集個体の胃内容物を検査したりすることはなかったようで、彼自身による本種についての記録は知られていない。またHolstから標本を受け取って論文を書いたH. Seeböhmも、オガサワラカラスバトの食物のことについては何も書き残していない。

オガサワラカラスバトが最後に確認された1889年より以前に小笠原に上陸し、実際に野生のオガサワラカラスバトを見たと思定される人物の公の報告記録がいくつかある (例えば関係文献が大熊、1985、に紹介・翻訳されている)。筆者はオガサワラカラスバトの記録を再検討するため、それらを含む複数の古文書の内容を改めて通覧した。その結果、F. H. von Kittlitzの著作の中に今まで見過ごされていたと思われる本種の食物に関する記述を見出した。

Kittlitzは1828年に小笠原に上陸し生物の観察・収集を行った。彼はオガサワラカラスバト (*C. versicolor*) の命名者でもあるが (Morioka et al., 2005)、このときの探險航海を記した回想録の中で、本種について次のように述べている (Kittlitz, 1858)。

「私はこの地 (小笠原) でさらに、後述するかなり大きなハトを認めた。そのハトはFächerpalmeの小型の球果がとりわけ好きである」 (p.170)

この大きなハトがオガサワラカラスバト (= *C. versicolor*) であることは、同じ本の少し後のページ (p.174) に示されている。またFächerpalme (fan palm: 直訳すればオウギヤシあるいはウチワヤシ) に対しては*Corypha japonica*の学名を使っている (p.168)。*Corypha*は外見がビロウ類に似ているコウリバヤシ属のことである。しかし*Corypha japonica* Kittlitzはビロウ*Livistona chinensis*を指している (大井、1965)。したがってこれ

鈴木：絶滅固有種オガサワラカラスバトはオガサワラビロウの種子を食べていた？

は小笠原産のビロウつまりオガサワラビロウ *Livistona chinensis* var. *boninensis* のことを指していることになる。実際 Kittlitz (1844) は、小笠原の自然が描かれた図版中のオガサワラビロウに対して、“*Corypha japonica* ?” を当てている。

以上のことから判るように、Kittlitz はかつて小笠原でオガサワラカラスバトがオガサワラビロウの実を食するのを観察し、簡単にとは言えそのことを記録に残していたのである。また、彼は Kittlitz (1844) の中で“オガサワラビロウの堅い実が大きなハトの食糧として利用される”ことを述べている。大きなハトすなわちオガサワラカラスバトがオガサワラビロウの薄い果肉部分だけでなく、硬い種子部分も食物として利用していたことは間違いないだろう。

周知のように、オガサワラビロウはビロウの小笠原産固有亜種で、小笠原の樹木の中では比較的大きな実（約2cm）をつける（図1）。果肉部分は少なく、筆者が測定した種皮を除いた種子の大きさだけでも、短径 15.7 ± 0.8 mm、長径 17.0 ± 0.7 mm、高さ 12.5 ± 0.9 mm、乾重量 2.2 ± 0.3 g（平均±標準偏差、n = 24）もあった。現在のところ小笠原でこの実を食べる鳥は知られていない。比較的大型の種子食性鳥類であるアカガシラカラスバトも、多岐に渡る種子を食してはいるものの概して小型の種子を食しており、オガサワラビロウの大きな実を利用したという記録は得られていない（高野、1998；東京営林局、



図1 オガサワラビロウの落下果実。右半分は落下して間もないやや乾燥した果実、左半分に果皮部分が動物（おそらくアフリカマイマイなど）に食べられた種子を並べてある。大きさの比較のため左下に十円玉（直径23.4 mm）が置かれている。

2006；柴崎・星、2006；「附」参照）。

オガサワラビロウは小笠原に広く分布し、林床に多量の果実を散布する。おそらく長期間に渡って林床に残存するオガサワラビロウの実は、オガサワラカラスバトにとって身近で容易に手に入る豊富かつ重要な食料であったに違いない。オガサワラカラスバトは、アカガシラカラスバトと同様種々の小型の植物種子も食物としていたことであろう。しかし、オガサワラカラスバトとアカガシラカラスバトの食物の大きな違いがこのオガサワラビロウやさらに大きな木の実の利用の有無にあったことは十分あり得る。そしてもしそうであれば、この食性の違いが、両種が長く小笠原で共存できた理由のひとつではないかと考えられる。

ただしカラスバトの本土産亜種 *C. janthina janthina* はヤブツバキ *Camellia japonica* のような大きな種子も食することが知られている（清棲、1978；中村・中村、1995）。アカガシラカラスバトはオガサワラビロウの実を食べていないのか、食べていないとすれば単に種子の大きさの問題だけなのか、などについては今後注意深く検討する必要があるだろう。

Ⅲ. おわりに

Kittlitz (1844) は小笠原の自然を描いた有名な図版を残している。その図版のひとつ（図版15；例えば倉田、1983、にも転載図あり）に、林の中で採食中と思われる2羽のハトが描かれている。体色がやや明るく感じられることからこのハトはオガサワラカラスバトと思われるが、残念ながらその種名(学名)は示されていない。しかしKittlitzはこの図版に描かれた実をつけているオガサワラビロウの紹介に付け加える形で、「この植物の堅い実は大きなハトの食糧として利用される」と記している。したがって、図版に描かれた2羽のハトは、Kittlitz自身も観察した、地上でオガサワラビロウの実を採食中のオガサワラカラスバトを表しているのではないかと考えられる。

文 献

- Kittlitz, F.H.von (1844) : *Vier und zwanzig Vegetation - Ansichten von Küstenländern und Inseln Stillen Ozeans*. Friedrich'sche Verlagsbuchhandlung, Siegen, 68pp. + 24 plates.
- Kittlitz, F.H.von (1858) : *Denkwürdigkeiten einer Reise nach dem russischen Amerika, nach Mikronesien und durch Kamtschatka, II*. Justus Perthes, Gotha, 459p.
- 清棲幸保 (1978) : 『増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅱ』講談社、948p.

鈴木：絶滅固有種オガサワラカラスバトはオガサワラビロウの種子を食べていた？

倉田洋二（編）（1983）：『写真帳 小笠原 発見から戦前まで』アボック社、272p.

Morioka, H., E. C. Dickinson, T. Hiraoka, D. Allen and T. Yamasaki (2005): Types of Japanese birds. *Nat. Sci. Mus. Monogr.* No.28:1-154.

中村登流・中村雅彦 (1995)：『原色日本野鳥生態図鑑 <陸鳥編>』保育社、301p.

日本鳥学会（日本鳥類目録編集委員会）(2000)：『日本鳥類目録』日本鳥学会、345p.

Seeböhm, H. (1890): On the birds of the Bonin Islands. *Ibis* 2:95-108.

大熊良一（1985）：『小笠原諸島異国船来航記』近藤出版社、191p.

大井次三郎（1965）：『改訂新版 日本植物誌 顕花篇』至文堂、1560p.

柴崎文子・星善男（2006）：アカガシラカラスバトは種子散布者？. *Strix* 24:171-176.

高野肇（1998）：カラスバト その3—アカガシラカラスバト—. 私たちの自然 No.438:6-9.

東京営林局（2006）：『希少野生動植物種（アカガシラカラスバト）保護管理対策報告書』
関東森林管理局、94p.

[附]アカガシラカラスバトが食したことが知られる植物種子の例（高野1998、東京営林局2006、柴崎・星2006などによる）。

アカテツ、アコウザンショウ、ウラジロエノキ、オオバシロテツ、コヤブニッケイ、ヒメツバキ、シマイスノキ、シマホルトノキ、センダン、ムニンイヌグス、ムニンシロダモ、モクタチバナ、イヌホウズキ、ガジュマル、ジュズサンゴ、パッションフルーツ、パパイヤなど（学名省略）。